わがまちが生んだ偉人

偉人から読み解く「知人力」のヒント

黒澤止幾 Kurosawa Toki

幕末の勤王女傑・日本初の小学校教諭

その女性がどんな人物だったのか。それがわかる一文が『桂村史』に載っている。

「右十人仮牢に控えけるに、吉田寅次郎殿一人御呼込みとなる。声高に口書読み上げ、不届きにより死罪申し付くる声高らかに聞こえける。一件の人々皆々きょうざめ、顔見合わせ、兼て覚悟の面々も胸とどろかすばかりなり」

この場面を記録した人物は「右十人仮牢に控えていた」一人である。名を黒澤止幾（1806－1890）という。「止幾」の表記は色々あるが、ここでは『桂村史』に従う。

死罪を言い渡された吉田寅次郎とは、幕末の思想家で、萩（山口県）で「松下村塾」を主宰し、明治の世を切り拓いた多くの門弟を育てた吉田松陰である。

止幾はなんと、吉田松陰と同じ獄舎で、幕府の取り調べを受けていたのである。いったい何をして牢に入れられたのであろうか。

江戸幕府の大老となった井伊直弼は安政5年（1858）、天皇の勅許を得ずに、日米修好通商条約を締結した。

幕府が単独で外国と通商条約を結んだことに、水戸藩の徳川斉昭らが反発。これに対し、井伊大老は斉昭に謹慎を命じ、幕府に異を唱える人々を次々に投獄した。世にいう「安政の大獄」である。吉田松陰も捕らえられた。

止幾は茨城郡高野村、後の錫高野村（現東茨城郡城里町錫高野）に生まれた。夫と死別後、実家に戻った止幾は、行商などで暮らしを立て、安政元年（1854）、実家の寺小屋を継ぎ師匠となった。この間、各地の文人と交わり、和歌や俳句を学んだほか、尊王思想にも触れたようだ。

止幾は、斉昭の謹慎を知り、その無実を朝廷に訴えようと決意する。なんと一人、京都に向かったのである。安政6年（1859）2月、54歳の時だった。

山村で寺子屋を営む女性がこうした思いを抱き、一人で行動を起こすなど、当時、誰も想像すらできなかったであろう。

京都に着いた止幾は、国学者の座田維貞に、幕府の外交政策の誤りや斉昭の無実を訴える内容を記した自作の長歌を託した。

念願を果たせた、という思いだっただろう。しかし、止幾はその足で大阪の知人宅を訪れ、そこで役人に捕縛された。尋問後に江戸へ送られ、取り調べを受けた。

その中に吉田松陰もいた。刑の言い渡しは、同年10月のことだった。松陰に続き、次々に言い渡された。止幾は「中追放」。江戸十里四方、常陸国、山城国（京都府の南半分）への立ち入りを禁ずるものだった。

止幾は、下野国（栃木県）の知人宅に身を寄せた。安政7年（1860）、「桜田門外の変」で井伊大老が暗殺。止幾は錫高野に戻り、生家で再び、私塾を開いた。迎えた明治維新。止幾には第二の人生が待っていた。

政府は明治5年（1872）、学制を発布、小学校の設置を決めた。止幾は68歳の時、村の戸長（村長）らの依頼を受け、自宅を小学校に代用。自らも小学校教師に任命、日本初の女性教師となった。

高齢で教職を辞した後も止幾は終生、若者や親子、友人と付き合い、今日の人間教育を中心に諭し続けた。（文中敬称略）

主な参考文献
『桂村史』（平成16年、桂村発行）。『黒澤止幾―生誕二百周年記念誌―』（平成18年、黒澤止幾生誕二百周年記念事業実行委員会発行）等。

止幾の生家（令和2年8月1日現在）
＝城里町錫高野（筆者撮影）

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長
冨山章一